

## CORE プロジェクト ロンドン本部訪問の報告

2018年3月12日～14日、新里泰孝会長、八木紀一郎理事、久井田直之理事、水野勝之理事がロンドン大学を訪問しました。水野理事の担当学生3名も同行しました。本学会COREプロジェクト分科会のメンバーです。コアプロジェクトの本部がロンドン大学UCLにあります。コアプロジェクトを中心になって推進している、University College London (UCL) の Wendy Carlin 教授を訪ねてまいりました。

経済教育学会ではCOREプロジェクト（経済学の教科書 The Economy を e-book の形で配信するコンテンツを利用して世界各国の大学が授業するプロジェクト <http://www.core-econ.org/>）分科会を立ち上げたこと、それを日本の各大学の授業で活用するためのガイドブックづくりを行っていることの報告と、今後日本でCOREプロジェクトを広めるための提案を行うことが今回の目的です。

下記の日程で訪問しました。

3月12日午前

Meet with Wendy, Meet with CORE Team

3月12日午後

Workshop with Students and Delegates

3月12日夕

Kenjiro Hori at Birkbeck host delegates

3月12日夜

a lecture given by Stephen Wright at Birkbeck University

3月13日午前

King's College London, lecture given by David Hope

3月13日昼

Lunch with Antonio Cabrales (Academic Head of Economics Department)

3月13日午後

Workshop Delegates, UCL

3月14日午前

ECON1001 Lecture by Wendy Carlin at UCL

3月14日午後

ExploreECON UCL's Undergraduate research conference

研究会（workshop）以外にも、授業参観、UCLの学生との交流、食事会への招待、学部長との昼食会も設けて頂き、大変厚遇されました。

13日午後にはワークショップが開かれました。そこでは、八木紀一郎理事、久井田直之理事、「水野勝之理事および3人の学生」、新里泰孝会長の4つのプレゼンを行いました。訪問メンバーには充実した3日間になりました。

## Wendy 教授のコメント

初日の説明：

「経済学のパラダイムシフトに対応した内容のテキストを作りたいというコンセプトのもとに現在の経済の中で重要なコンセプトを盛り込んだのが CORE のテキスト。経済を取り巻く社会、生物圏、物理的環境との関係性も考えながら学ぶことが大切」

我々のプレゼンテーションの後のコメント：

「日本の経済教育の背景、そして英語での授業化、能動的学修の観点からなぜ日本では和訳版ではなくガイドブックを作ろうとしているのかがよくわかった。言語学的なアプローチによる語彙表の作成は興味深く、イギリスの学生にも役立つと思う。今回の CORE を学んだ学生が、どのように学んだらよいかのアドバイスをガイドブックに含めるのもよいアイデアだと思う。学生が渡英して、プレゼンテーションを行ったことも素晴らしい」

CORE の” The Economy” を用いた 3 つの授業を参観して、特筆すべきことは以下の点です。

1) この授業科目は学部 1 年生の経済学入門となっている。1 回 2 時間(夜間の場合 90 分)の講義。200 人から 300 人の履修者。経済学部生以外にも、社会学、政治学の学生も受講している。

1) レクチャーでありながら、PC 持参の学生は 70%以上。

2) 書画カメラ (OHP) を用いて、補足説明をペンで書き込みながらの授業もあった。

3) 細かくは掘り下げずにポイントをまとめていく。他の章との関連も説明する。(予習、復習・課題が前提となっている。予習・復習に 3、4 時間かける学生もいる。)

4) グラフの作図を行う際、グラフの変化を学生に問いかけながら進める。

5) 教師からの問いに対し、学生に隣同士で話し合う時間を与える。

6) 週 1 回のレクチャーを受けて、その後週 1, 2 回の少人数 (10 人程度、院生が指導) のチュートリアルがあるため、理解を深められる。

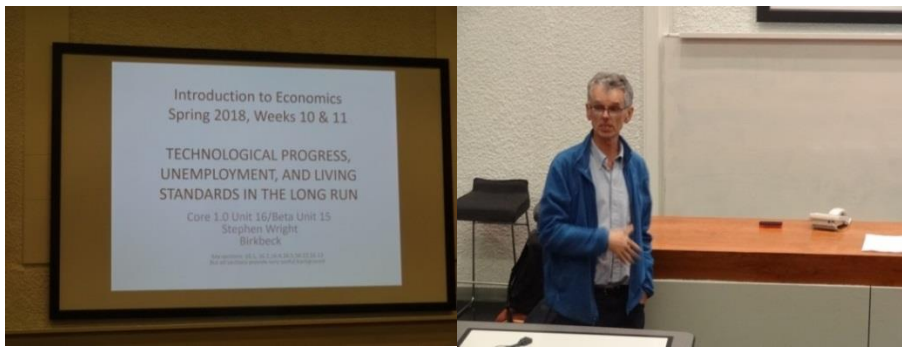
14 日午後の ExploreECON UCL's Undergraduate research conference は、学部生を対象にした独自の研究を発表するプレゼンテーション・コンテストであった。受付の教室には 1 年生のポスター発表も行われていた (英国の大学は 3 年制)。プレゼンテーションセッションでは、3 つの分野: Work and Wages, Expectations and perceptions, Aid, Abortion, Art, and Drugs-#WhatEconomistsReallyDo-で計 10 本の報告があった。一年生限定の動画作成プロジェクトでは、貧困・格差をテーマにした経済史的ムービーもあった。外部スポンサー (The Economist, Bank of England など) の審査が行われた。表彰式では、明治大学の学生がプレゼンターを務め、受賞者に賞状を授与した。学生の発表会およびスポンサーシップ、表彰が効果的に学習意欲を高めていると感じました。

(文責：水野勝之、新里泰孝)



3月12日午後

Workshop with Students and Delegates



3月12日夜 Lecture by Stephen Wright at Birkbeck University



3月13日午前

King's College London, lecture by David Hope



3月13日午後

Workshop Delegates at UCL, Wendy Carlin 教授を囲んで



3月14日午前 ECON1001 Lecture by Wendy Carlin at UCL